

3 近世六日市場屋敷について

細田遺跡では近世に属する掘立柱建物や多数の近世陶磁器が出土し、調査区の隣接地には近世の墓標が存在する。これらは、近世の検地帳、高人数改帳に記載される「六日市場屋敷」に属するものと考えられる。細田遺跡調査区西半には佐藤義美氏宅（字六日市場43番地）が所在していたが、佐藤家は近世六日市場屋敷の子孫にあたる。ここでは六日市場屋敷に関連する文献資料を紹介し、出土遺物、検出遺構との関連を考察する。六日市場屋敷は仙台藩胆沢郡下胆沢下衣川村に属する。以下に、「六日市場屋敷」の記載がある文献を示す。

① 寛文二年（1662）下衣川村御検地帳

六日一場屋敷 藤左衛門 氏家主水分
耕作者 同人 半右衛門 吉左衛門 半兵衛
筆名 道下 川はた うしろ 槻木はた のきハ 西はた
面積 一町九反八畝一歩
値 五百三十七文

② 安永六年（1777）膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出（衣川村1988「衣川村史IV」所収）

一屋敷名 八拾四
一 並木屋敷 四軒 · · ·
一 六日市場屋敷 三軒

③ 天保七年（1836）下膽澤下衣川村高人数御改帳（衣川村1989「衣川村史V」所収）

・同宗同寺（曹洞宗雲際寺）
六日市場屋敷甚十郎51 女房さよ46 聲留松26 女房里よ22 男子嘉蔵4 弟寅吉42
合六人分男四人女式人
高七拾七文
・同宗同寺（曹洞宗雲際寺）
同屋敷覺之丞66 女房はる66
合式人内男壹人女壹人
高武文 外一三拾式文本地西磐井平泉村之内高館江入作

④ 安政五年（1857）下膽澤下衣川村高人数御改牒（衣川村1989「衣川村史V」所収）

同宗同寺（曹洞宗雲際寺）
六日市場屋敷留藏47 女房里よ43 女子はる5 女子なか8 男子嘉助10 女子さん12 男子嘉蔵25 女房さよ17 父甚十郎
72 女房さよ67
合拾人内男四人女六人
高七拾七文
但六日市場屋敷覺兵衛跡地親類組合預地 親類留藏
与頭伊惣平

高拾式文 外一三拾式文 本地西磐井平泉村之内高館江入作

⑤ 慶応二年（1866）下伊沢下衣川村高人数御改帳控（衣川村1989「衣川村史V」所収）

同宗同寺（曹洞宗雲際寺）

一六日市場屋敷 留藏56 一女子はる14 一女子なか17 一男子栄吉19 一男子嘉蔵34 一女房さよ26 一孫女子りよ4

合七人 男三人 女四人

高七拾七文

但六日市場屋敷覚兵衛跡地親類組合預地

親類留藏

与頭伊惣平

高拾弐文 外一三拾弐文

本地西磐井平泉村之内高館江入作

⑥「近世の衣川」(佐々木1995) 引用原文文献未見

「享保二十一年（1736年）押切にて六日市場屋敷甚平の畠が木材御蔵として利用されている所を見る」との記述がある。

六日市場屋敷の開始年代

細田遺跡では78点の近世陶磁器が出土しており、これらは六日市場屋敷に伴うものと考えられる。出土の近世陶磁器の中で最も古手のものは大橋編年Ⅱ期の肥前産磁器（92・93・110～112）である。実年代は1630～1650年頃と推測される。近世陶磁器の他に16世紀代の中国産白磁皿（44）や大窯期の陶器皿（46・47）も出土しているが、17世紀第1四半期にブランクがあり、近世六日市場屋敷には連続しない遺物と判断される。よって、近世陶磁器の年代観からは六日市場屋敷の開始年代は1630～1650年頃、17世紀第2四半期と推測される。六日市場屋敷の存在を文献上で確実に確認できるのは、寛文2年（1662）の検地帳である。17世紀第2四半期に成立した屋敷であれば、寛永17～18年（1640～1641年）に仙台藩領内で行われた寛永検地の検地帳への記載があるはずである。下衣川村の寛永十八年（1641年）検地帳は5冊の内3冊が残っているが、3冊の中に六日市場屋敷の記載はなく、おそらくは欠損の2冊の内に記載されていたと推測される。

掘立柱建物との関係

近世民家の母屋と推測される掘立柱建物跡はSB6・SB11・SB32の3棟がある。これらは六日市場屋敷の母屋と推測される。出土遺物等から古い順にSB11→SB6→SB32と推測される。想定に過ぎないが、1棟の存続年代を40年間とすると、SB11（1640年～1680年頃）、SB6（1680～1720年頃）、SB32（1720～1760年頃）となり、それ以降、礎石建物の母屋に建て替えがおこなわれたと想像される。

墓石について

上記の人数改帳等に記された人名、年齢・近世墓石に記された没年から、六日市場屋敷の系図を推測する。1代を25年、没年を60才と仮定するが、もとより根拠のあるものではなく、代数も含め、近世屋敷の流れを知るための目安的なものと理解していただきたい。

初代（1610～1670年頃）→二代藤左衛門（1635～1695年頃）→三代（1660頃～1727年）→四代甚平（1685頃～1745年頃）→五代（1710頃～1785年）→六代（1735頃～1814年）→七代（1760頃～1820年頃）→八代甚十郎（1786～1857）→九代留藏（1811～1872）→十代嘉蔵（1833～）

「②下衣川村風土記御用書出（安永七年）」の「代数在之御百姓」には15人（九代～四代）が名を記されているが、この中に「六日市場屋敷」は含まれていない。しかし、下衣川村寛永検地帳（3/5冊の残存で）には63の屋敷が記され、安永年間までは通常5代程度は経過すると考えられるのに、「代数在之御百姓」は15人にすぎない。これは「代数在之御百姓」の掲載には何らかの選択基準の存在を覗わせる。よって「代数在之御百姓」に「六日市場屋敷」が無い点は問題がないと考える

そして、推測した系図と文献にみられる記載から、墓石と人名の相関関係を推測する。墓石の最古級のものは9の享保14（1729）年と10の享保12（1727）年である。屋敷の成立が17世紀第2四半期と

すれば、この享保の墓石は年代的考えて、初代のものではなく、三代のものと推測される。元禄以前は墓石の造立は一般的ではなく、初代・二代の墓石が存在しないのは不自然ではない。もしくは、紀年銘のない19の五輪塔が初代の墓標の可能性も考えられる。「③天保7年人数御改帳」には当主甚十郎の両親の記載はなく、天保7年以前に両親は亡くなっていることがわかる。よって墓石1（天保15年）、墓石2（天保14年）は甚十郎の両親の墓石ではない。墓石1・2は別世帯ではあるが、「同（六日市場）屋敷覚之丞66 女房はる66」の墓石である可能性が高い。また十代と推測される「嘉蔵」と妻「さよ」の墓石がない。これは明治17年の「墓地及埋葬取締規則」布告以降に公葬墓に葬られたためと推測される。また墓石の中に四代のものが見あたらない。四代の妻のものと推測される墓石15は、倒れて半ば埋もれている状況を掘り起こしたものである。その周囲には倒れ埋もれた墓石状の石がまだ見受けられ、その中に四代の墓石が存在すると推測される。墓石の16～18は佐藤家の墓石とは少し離れた位置に立ち、佐藤家直系の墓石ではないと認識されているという。

墓石番号	戒名	人名など	生没年など
1	微量禪定門	覚之丞	明和8年(1771)～天保15年(1844) 74歳没
2	冬林禪定尼	はる	明和8年(1771)～天保14年(1843) 73歳没
3	雲外了相禪定門	八代 甚十郎	天明6年(1786)～安政4年(1857) 72歳没
4	不明	さよ？	寛政3年(1791)生まれ 慶応2年(1866)以前に死去 墓石の紀年銘不明
5	眞相道空信士	九代留藏	文化8年(1811)～明治5年(1872) 62歳没
6	眞法妙性禪定尼	里よ	文化12年(1815)～安政6年(1859) 45歳没
7	不明	七代か	墓石の紀年銘不明 天保7年(1836)以前に没
8	・・禪定尼	七代妻か	天保7年(1836)以前に没 文化3?年(1806?)没か
9	妙白禪定尼	三代妻か	享保14年(1729)没
10	道觀禪定門	三代か	享保12年(1727)没
11	天真露白禪定門	六代か	文化11年(1814)没
12	桂岸妙秋禪定尼	六代妻か	天明2年(1782)没
13	頭覺了禪定門	五代か	天明5年(1785)没
14	端相了然禪定尼	五代妻か	安永2年(1773)没
15	香林禪定尼	四代妻か	宝暦13年(1763)没
16	淨心・・・	不明	不明 佐藤家の直系ではないと思われる
17	不明	不明	元文3年(1738)没 佐藤家の直系ではないと思われる
18	不明	不明	宝暦10年?(1760?)没 佐藤家の直系ではないと思われる
19	なし	不明	五輪塔 六日市場屋敷初代、二代の可能性がある

引用文献

- 衣川村 1988 「衣川村史IV」資料編3
 衣川村 1989 「衣川村史V」資料編4
 佐々木元實 1995 「近世の衣川」